

水俣病事件を取材して 20191013 2006・11・12 20170717 更新 大治浩之輔

『埋もれた報告』 1976・12・18 を題材に考える・・・講義資料

*S,51年（ロッキード事件0年：水俣20年）9月11日ごろ～12月18日放送にかけて取材・制作（レポートもアナコメントも全て私が書いた）。

*s52年度の芸術祭参加の放映録画 or 最初の放送は当時発売されたばかりのSONYの家庭用VTRボーナス相当分20万円で録画。芸術祭は大賞をとった。

I 作品内容について・・・取材はやってみないと分からない

*取材動機 水俣病20年。s48年水俣病判決三年、「破局」状況。ナントカナラナイカ

*意図・狙い 防ぐ手立てはなかったのか、イヤ、あったのにとられなかった なぜか。

資料（手元に公文書）と証言で検証し、今後への教訓をひきだしたい。20年たっているから、皆インタビューに応じてくれるだろう、クールな論証番組をねらいたい・・・

つまりは、行政責任に焦点、被害問題 etc は切り捨て、背後に。

*結果 結果はご覧のとおり、クールな論証どころか取材対象との格闘の連続、意図とは正反対になった。（予想しなかったわけではない、取材とは所詮、100万の想定をしてみても、どうなるかはやってみてのこと）

前説

ドキュメンタリー最初のシーンとコメント。

12月15日、ひとつの判決があった。水俣病の認定作業が遅れているのは、県の行政の怠慢であり違法である。熊本地裁の判断である。だが、患者救済の見通しはない。水俣病が問題になって20年。被害は、九州の不知火海全域に広がっている。すでに、どれだけの患者が人知れず死んでいったか。汚染の影響が何処まで及んでいるか。その推定さえつかない。現在の破局を避ける道は、果たして無かったのであろうか。

水俣60年 最高裁判決04.10.15から15年。「歴史・・・苦難の歴史・・・が繰り返されている」

残念ながら このドキュメンタリーの問いかけは 古びない

取材対象との格闘・・・必然的にこの作品に刻み込まれた特質がいくつか

1 張り込み、待ち伏せ、追っかけ・・・取材拒否との闘い or 対抗策

①伊藤蓮雄(県衛生部長) 番組冒頭、最初の登場人物、いきなりPDが出てきて、あとから大治が追いつく。旧知・窮地の人。自宅張り込み・追尾

②寺本耕作 (s34当時の熊本県知事) 参議院議員待ち伏せインタビュー 第一ラウンド・・・12月5日投票の総選挙の応援演説会場にて。第二ラウンド・・・開票日 am3時～乙女山公園・息切れ。(伏線---秘書氏の言。次の選挙でない。早朝散歩の習慣。言論の自由)

③吉岡(社長)、西田(工場長) 第一ラウンド自宅。第二ラウンド刑事裁判熊本地裁前。

④秋山(通産・軽工業局長)

敵性証人になるほど、20年経ってもなお、拒否の姿勢が強烈。「副会長とはポン友だ」「次の転勤異動はいつだ」

2 ことば、インタビューの力・・・核心にいかに向かうか（下調べ・明確な焦点①全体設計②その中での個別の位置と焦点 fighting spirit)

①ことば・・・しのぶ 20歳 字幕スーパーしたくない、復唱しながらのインタビュー、聞き間違えは許されない。

②期待はずれ・・・i 守住(衛生課長) イザとなると歯切れが悪くなる。

ii 鰐淵(熊大医学部長) 意外とひいてる。⇔徳臣

iii 松岡(漁協出身県議) 「テラ(モト)に腹はなかった、金でなんとかなるくらいに」・・・寺本知事ですね、と念を押すと引っ込むだろう、の判断

③切り込み・・・ 聖城(厚生省・衛生部長) 機材の制約 エクレール(10分;1分1万円) 2ロール目の(相手の記憶違いを)切り返し、(正確な状況認識へ)押し返し。(行政無責任の)問い詰め。

④敵性・拒否への切り込み・・・

i 寺本。第一ラウンド。第二ラウンド。準備、相手の態度。

ii 秋山。二重マイク。問うに落ちず語るに落ちる・拒否の態度が雄弁に言外の言。

⑤言いよどむことを言わせるタイミング・・・

i 長野 金の話、裏とり。

ii 大八木(千葉大)「タメにするものではあった、しかし、」「タメにするとは???'」すぐ訊く。

iii 世良完介(医学部長・法医学)「当たり前が終わってれば・・・竜頭蛇尾・・・それはいけない」彼の心情吐露は全て聞くべし だが6分ロール、「当たり前が終わってればのアタリマエとは」「会社のご機嫌取りに終わってなければ」

⑥病気・・・大島(日化協専務理事)インタビューとったが、家族の申し入れあり。本人意向を念押しできず。ぜんたいを通して、程度の差こそあれ、思惑通り・完璧はなし。

3 切り捨てたもの(本ドキュメンタリーのテーマ設定から)・・・被害

30分 被害編 作る取材はしたが(90分になる。当時Nスペが45分番組)

(テーマ設定とはなにか。焦点を絞るとは対象を限定すること。本論へ)

取材者リスト(カット・・・プライバシー)

スタジオからこんにちは

: <20年という歳月と公文書で口の重い関係者を語らせうるかも>

1、79人・・・1000人

2、今、結果論から言うと、何をすればよかったか(他の条件無視して)全て分かる。 ex、工場排水停止 or 魚のチェック

3、しかし現実にはそうならなかった。

4では、何故、そうならなかったのか

その選択の道筋を探る中に、現在の事態の説明ではなく、問いかけを持ちうると思った。

私、社会部記者として5年間、毎年、取材している。

取材は十分とはいえないがやってよかった、ラストチャンス(重要証人が欠けていく)。

20年の歳月の重み

1 被害 31年誕生の赤ちゃん・・・20歳

2 証言の欲しかった人が死に or 病んでいる

3 歳月の中で怒り・うらみ etc 風化しない人、忘れていない人、その対応自体に当時の構造を見る思い。

II ニュース or ドキュメンタリー(社会派)・・・の作り方=見方

II-1 テーマ設定

*事象(Total=複雑な構造)へのアプローチ： 常に限定的 i,e テーマ設定

『埋もれた報告』～一つの現象〔水俣問題〕を前提として防ぐ方法なかったか

1 行政責任へのアプローチ・・・テーマ設定。

ほかにも

2 企業責任(倫理)～企業(集団)行動へのアプローチ。 そのときのチッソ内部からの軌跡の追及。19950701N スペ。

3 刑事捜査当局の責任 へのアプローチ。 早く摘発していれば・・・『空白の20年』1979 s 54・3・22。

4 医学者・研究者たちへのアプローチ。 EX「医学者たちの責任」⇔疫学調査なし、認定の遅れ

*つまり、常に現象 TOTAL を前提 or 対象としつつも、限定的テーマ設定となる。

*『埋もれた報告』の場合、冒頭の2フレーズ・3分・がテーマ設定。ただし、それを詳しくいわない。言っていると論文、というより

*方法として映像・音・ことばのインパクトで短時間にわからせようとする(有効かどうか疑問だが)

*ニュース：NEWS 故に現象・限定的

番組：一応せきとめているにせよ、やはり限定的

*アプローチが何であれ、やってみると

：意図と結果の大違い；取れたもので勝負・・・棒ほど願って

：にもかかわらず、言外の言とか、逃げる相手の様子とかが物語る、意図になかった、効果とか。・・・映像・音・言語・無言語、複合のドキュメンタリーの特性

：にもかかわらず、とったものを、枠の制約で、捨てざるを得ないつらさ、説明時間枠のないつらさ。

II-2 カットした前提—水俣病被害(へのアプローチ)

『埋もれた報告』では被害者は胎児性患者たちと資料映像のみ

*水俣病被害の実像とは何か

1 病気として：細川一報告 s34年8月

2 差別構造として：

3 人生(e,x 胎児性)として：

1 水俣病とはどんな苦しみか～病気として～

①病気——肉体的苦痛として(感覚、運動、視野、構音、ベッドでロープを切る壁をかきむしる死)。人類初めての病気、人に説明できない。「サカナぴちぴち」：聞くほうのイマジネーション。環境→人体：はじめて Cf 最初の報告(細川)。ハンターラッセル。：労働災害。

②病理・病像

*そもそもどの範囲が水俣病か(何が本当の水俣病か)：公害病=新病=に常に付きまとう問題⇔被害救済(認定)⇔補償線引き・限定問題

：旧来の病気パターンへの 分解的押し込め

：初期・劇症型・典型症状への限定(徳臣・伊藤)⇔環境汚染(健康の偏りピラミッド)

*疫学調査の欠落

2 社会的不認知の苦しみ

- * 公害病認定・新潟判決・水俣判決「肩身の狭い思いからの解放」それでも判決当日閉じこもる老婆、
- * 奇病村八分
- * 怠け病（浜付：長崎炭鉱から帰った男の将棋）
- * 理解されていない病
- * 誤解(の悲劇) ～獅子島の老婆(ガン宣告)

3 社会的差別病

要因 ex：被害(患)者のもたらす“加害”～サカナ売レナイ s31～34 水俣
s47 水俣の四分五裂・御所の浦藤野と漁協（時間的・空間的な構造的被害）

.ex：被害者と加害者の社会的力の格差～王様チッソと家臣(40%従業員)にもなっていない周辺民(流れついた者
たち)。



☆<水俣病被害の社会的実像とは何か> というテーマ、となる。

- ① 日本の社会構造の逆投影：被害者がついに『加害者』となる <村八分> 無限差別構造。 最も近い
ものが最も日常的・激しい差別。閉じられたムラ、ムラ、ムラ。
真の加害責任者へ到達する距離(段階)の遠さ
- ② 水俣「病」そのものの切り刻み：新病＝TOTAL に捉えられず(疫学)、常に既成概念で限定・デフォルメ・刻ま
れる。

4 環境汚染とは何か・・・（水俣事件における）・・・

* 実態・・・？

- ① 不知火海汚染：ヘドロ映像：Hg60 トン～200 トン？：復元できない
- ② 食物連鎖

* 結果として出た：地域ぐるみ・家族ぐるみ・人生ぐるみの崩壊：トハ

s30～40 年代：そこで終わらない。・・・当時の騒ぎを嫌って出た人たち：ex 関西訴訟 ex50 年長崎から帰郷の浜付夫
妻・怠け者視野狭窄将棋・水俣病に結び付けない「逃れた」と思ってる。妻痙攣・夫申請しない。Why？地域
の目がこわい。・・・

* ソレガ いまから今後へどう結びつくか

5 被害の救済とは何か・被害補償とは何か・加害責任とは何か

『汚染追放の値段』（公文書発見のきっかけ）

* s34：30 万円。S43 年：300 万円～400 万円。S48 年判決：1600～1800 万円。・・・申請者急増・チッソ負債急増
（旧認定：心配つぶれないか。申請者：いつまで待たせる・・・不作為確認訴訟）

PPP の実像・からくり：

- ① 行政と銀行は責任をパス。
- ② 被害の限定。

被害特定・・・ a 誰が、b どのように、被害を決めるのか。[ex：a 本人申し出主義か、b、とあみかけての疫学調査か・・・
被害(像)把握に決定的差]

- ③ 企業の無軌道ダンピングへの制約効果。

6 刑事検察当局の責任

『空白の20年』s54年3月22日 放送：s51年の起訴、役に立たない、出し遅れの証文。

Ⅲ テレビ表現の特性 と 取材の姿勢

*このドキュメンタリーに「伝わる」ものがあるとすれば、取材する姿勢の問題～あるとき なぜ防げなかったのか

↑

*それまでの取材に根差したもの・・・s47年初訪問、上村智子、御所の浦。

*ジャーナリストの志・・・取材に根差したもの：被害を被害と見てそこに立つ、自己の能力の限界をもさらけ出す覚悟。

*テレビの特性：微細な事実を集めて構成して初めてひとつのことが言える：

証拠で論理。学者ではない。地べたを這いずり回って虫のように一つ一つ集めて。

*棒と針：とはいっても、やろうと思ったものが達成されないことたくさん。

*これで事態が変わったか：矢と歌：理性と感性：シニシズムでなく信仰に近くなる確信。

賽の河原に石を積む。 何度でも挑戦する原点。ロッキード事件取材も同じ。

受賞時の感想文

公害取材はしんどいものです。救われようのない被害を目の前にするからだけではありません。取材拒否との闘いがあります。加害者たちが取材を嫌うのは覚悟の上ですが、被害者たちも思い出したようにしか来ないマスコミに不信を抱いているのです。わたしたちはありのままの姿をさらけ出す以外にありません。取材とは裏返せば取材対象から吟味され批判されつくすことだ、と痛感させられました。

#####

1 テレビ：＋可能性と－限界。

*映像・言語 total の複合体：取材が核心をつけば迫力、深さ、言外の言を含めた意味、インパクト。を生み出す可能性もつ。 ⇨陥穽

*反面、取材拒否の反応は活字媒体の比ではない 逆に、活字取材に簡便さ(陥穽)と、まどろこしさ(一挙に全てを画面に凝縮できない)あり。

2 総論から入れない

実証性と(証拠・証言にもとづいた論理的)帰納を本来的に求められているメディア。ジャーナリズムとして必須の有利な条件設定であり、同時に、苛酷な条件設定でもある。…すぐ取材拒否にあう。(ことばと説明的資料的映像パターンからなら総論からは入れるが、メディア本来のインパクトはない)。活字インタビューOKでも、カメラ・マイクを拒否は多い。

3 マイクとカメラは 武器でありハンデキャップ

本物は、きちっと押さえるところ押さえなければダメだが、おさえたら活字でそれを表現するには、百万言がある.ex 秋山のマイクおさえるタイミングの表情 etc、

マイクカメラのほうがペンよりも、押さえるべきところをおさえろ・突っ込めという要求度合いが比較を絶して強い、ひくに引けない。ペンはひいていても書ける。記者とカメラマン。

但し、ニセモノは、「映ったから音がいっているから」というだけで、活字よりもっと安易にやめられる。左右するのは、取材者たちの志、と能力(力量、粘り・・・)。

4 志 (を支えるもの)

《水俣病はなぜいまだに続いているのか》…法廷立証の説明でなく、ドキュメンタリーは、製作過程の意図と結果のギャップの軌跡でそれをときほぐし説明する。

当方の志なくしてぶつかりあいも開拓もない(報道はない)ということを含めて。ドキュメンタリーの一番奥にあるものは志。

なぜ、くたくたになっても来る日も来る日も起きて歩いて闘い続けたのか。

被害・理不尽無限の子どもや老婆：悲哀といかり。深き淵より闘いに立つ人たちへの共感。私の後ろにいつも被害者たちしのぶや智子たちがいる。

ぶつつけインタビュー：調査の有無・狙いの高低：テーマが方法を生む、

筋金入りテーマが筋金入り方法を生む。

・・・取材・表現者に求められる自覚と緊張・・・

われわれは決して現象 total を把握することはできない⇨故に必死でアタック・アプローチする。仮設と微細事実の積み重ねによる検証。

cf. ハルバースタム「面白い=浅い=非本質=TV ジャーナリズム」への反論。

K、オオハル「志＋読み取る力」：構造(システム、日本的)：被害者の多様な生き方に構造を読み取る(第一回水俣訪問取材)；一人の被害者の人生の歴史に構造を読み取る。：読み取る力＝ジャーナリストのセンス(ハート)・能力

5 自分のすべてをさらけ出す覚悟・賽の河原に石を積む覚悟

6 一本のドキュメンタリーは一人ではできず、多くのNHK仲間の協働の賜物。

2006.05.30 更新)

2006.09.14・木 前説 原稿 または 後説 原稿

2019.10.16 k・大治